慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『詩本草』と柏木如亭
Sub Title	"Shi Bencao (詩本草)" and KASHIWAGI, Jotei (柏木如亭)
Author	新谷, 雅樹(Shinya, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.152- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『詩本草』と柏木如亭

新谷雅樹

一　舌とことば

名立たる美食家で、愉快なペダントのブリア・サラヴァンは、その快著『美味礼讃』（岩波文庫）の中で、「ギリシアに文字をもたらしたカドモスがシドンの王の料理人だった」ということを書きしるしている。カドモスとはギリシア神話中の神の名であるが、神話というものは何がしか象徴的な意味を持つものだ。それかあらぬか、慧眼なロラン・バルトは「ラ・ラング（舌とことば）」というエッセーのなかで、この、すこぶる暗示に富んだ一行を引き取って、次のように述べている。

「ギリシアに文字をもたらしたカドモスは、もともとシドンの王の料理人であった。言語とガストロノミーをつなぐ関係のたとえとして、ギリシア神話中のこのしるしをあげておこう。言語能力にせよ食行為にせよ、いずれ同一の器官にかかわるものではないか？生産的と評価的なちがいはあるが、広くいうなら同一の器官――ほお、口蓋、鼻孔――にかかわるものではないか？これらの器官は味覚の役割をつかさどると同時に美しい歌をももたらしてくれるのである」（松島征氏訳）

口は単に食物を咀嚼する器官ではない。そればかりか、妙なる歌を唱う器官ともなる。この、食行為と言語能力とを結びつける、バルト一流のレトリックは、なかなか魅力的だ。しかし、『中庸』に孔子の言葉として、「人、飲食セザルハ莫シ、能ク味ヲ知ルモノ鮮キナリ」とあるように、しんじつ味を知るものは少ない。まして、すぐれて味覚の発達した舌と、たくみに言葉をあやつる舌とを、同時に兼ねそなえる人にいたっては、なおさら稀であろう。カドモスは神話中の象徴的な人物であって、いわばカドモス的な人間は、この世には稀有な存在なのであろうか。

いや、決していないという訳ではない。例えば、そういう類まれな一人に、柏木如亭（一七六三～一八一九）がいる。江戸頽唐期の漢詩壇に詩名をほしいままにした如亭山人の食道楽ぶりは、彼の漢文戯作『詩本草』（文政五年刊）によって知られているだろう。この諧謔味に富んだ著作は、しかし、ただの戯作ではない。それは石川淳の言葉を借りれば、「嗜詩嗜味の二癖をほしいままに、四方を周遊して至るところの佳殽に飽き、吟詠玉を吐いて」なった一巻で、バルトの言うところの言語とガストロノミーをつなぐもの、言い換えれば、詠詩と美食とが理想的に結びついたものなのである。

本書成立の由来については、死に先立つこと半年あまり前の、文政元年（一八一八）に執筆された、巻頭の「自引」[1]に委曲がつくされているので、次にその全文を引いてみよう。

余ガ性、味ヲ嗜ムコト甚ダシ。而シテ詩ヲ嗜ムコトハ、味ヲ嗜ムコトヨリモ更ニ甚ダシ。少小ニシテ厳慈ニ棄テラレ、孑然タル一身、手ニ一能モ無ク、惟ダ口ノミ是レ饞ル。青年ニシテ家ヲ去リ、詩ヲ売リテ、口ヲ四方ニ餬ス。数十年来、憑リテ死セズ。止ニ憑リテ死セザルノミニ非ラズ、到ル処、家居ノ致スベカラザルノ味ニ飽クコトヲ得タリ。以謂ヘラク、是レ亦タ一身ノ清福ナリト。今、且ク紫雲山ノ一小地ヲトシ、香炉茶鼎、好友往来シ、吟談シ

テ老ヲ養フ。但シ侯鯖郇厨ハ猶ホ未ダ口ニ忘ルルコト能ハズ。偶々数十事ヲ省念シテ、数十段ヲ録シ得タリ。客ニ、戯レニ余ヲ以テ詩中ノ時珍ト為ス者有リ。輒チ呼ンデ之ヲ洒落ル。名ヅケテ詩本草ト曰フ。（原漢文。以後、引用文中、送り仮名が片仮名であるものはすべて同様）

自ら述べるように、如亭は若くして父母を失い、家業を捨てて四方を遊歴した、いわば江湖倫落の詩人であった。生計の道はといえば、ただ潤筆料に頼るほかはなかった。「詩ヲ売リ画ヲ鬻グ、冷生涯」(2)と我が身の不遇を託したように、それは零落たる生涯であった。だが、その流浪の道々、かえって家常には望めぬ、思いがけない口福にあずかったという。その珍味佳肴の思い出を、詩と散文もって綴ったのが、『詩本草』一巻なのである。

「老饞」あるいは「饞腸」とみずから称した如亭は、行く先々で、その名に恥じない健啖家の面目をあらわす。「蕎麥ハ信濃ヲ以テ第一ト為ス」とか、「吉備ノ金山鯛ト称スル者、甘美絶倫」とか、「葛貲屋（カツヲ）ハ吾ガ郷ノ一大奇品ナリ」とか、ずいぶん力こぶを入れて賞美しているし、あるいは「勢ノ霞浦ノ魚蟹ハ美ナリト聞キテ」わざわざ当地へまで足を伸ばしたり、あるいは「黄鹿（シカ）・黒猪（シシ）・白兎（ウサギ）・玄熊（クマ）・貉子（ムジナ）」といった四つ足はおろか、「猴児（サル）」の肉まで賞味したりで、いやはや、まったく驚くべき饕餮ぶりなのである。

如亭は生粋の江戸っ子であったが、元来、江戸というところは山海の幸に乏しい土地で、再び石川淳の受け売りをすれば、「ただ無い袖をどう振るかといふ才覚のしどころに、江戸の料理法が発達したばかり」である。江戸わずらい――白米を常食とする江戸人の病気、脚気のこと。箱根の関を越えると、自然に治ったと伝えられる――という言葉があったところからすると、江戸人の口もかなり奢っていたようだが、それにしても肝心の材料が乏しければ、いきおい、「海の

芥に類するノリまでが漁り尽くされ、カツヲのやうな顎に肉の落ちた魚が格を上げられた」という仕儀にいたったのもやむを得まい。だが、そういう料理の貧弱な故郷の江戸を離れて、信州では松茸をたらふく食い、吉備では瀬戸内の魚を骨までしゃぶり、京都ではおつな祇園の田楽豆腐に舌鼓を打ったというのだから、生涯を漂泊のうちに過ごした不遇の才子とはいえ、「口腹家」としての如亭は、「一身ノ清福」をぞんぶんに味わったというべきだろう。『詩本草』の巻末に付された、晩年の友人・梁川星巌の識語に、「山人最愜心之筆」とあるが、本書はまさしく、食福をきわめた如亭の、得意の書であると言っていい。

しかし、本書は単なる食通の料理書ではない。よく医食同源といわれるが、従前の料理書は、日本のものであれ中国のものであれ、今日の栄養学的な色合いが濃く、いうなれば本草学の一種と見なされてきた。日本の料理書の古典といわれる『本朝食鑑』（元禄八年刊）もそうだし、中国元代の『飲膳居要』、『居家必用事類全集』などもそうである。さきほど引用した「自引」によれば、ある人に「詩中ノ時珍」と評され、つとに名高い明の李時珍の『本草綱目』をもじって、『詩本草』なる書名をつけたという。なるほど本書には、食味の品評にまじえて、食物の気味能毒を説く本草学的な記述があったり、動植物の名を考証する名物学的な記述があったりする。そこに本草学的な伝統の尾を引いているようにも見えるが、というよりも、これはやはり当時の漢文戯作にありがちな書名のもじりと見るべきであろう。本書はなによりも好事の書であって、博識と諧謔精神に富んだ、いわば文人的弄筆の所産なのである。とはいえ、同じく漢文戯作である『本草妓要』が『本草備用』の、『本朝色鑑』が『本朝食鑑』のパロディーであったというような、悪いシャレではない。この『詩本草』は見かけこそ、漢文戯作風の意匠が凝らされてはいるものの、実は詩を中心とした書なのである。ただ、題材が飲食に求められているにすぎない。

二　新しい紀行のありかた

さて、『詩本草』は全部で四十八段からなるが、各段にはたいてい、珍味佳肴にちなんだ詩が、一首ないし数首、収められている。詩に詠われた食べ物は、疏菜、茸、魚介、禽獣の肉、酒、麥蕎、果物など、バラエティーに富んではいるが、そこにはおのずと詩人らしい選択眼が働いている。「復タ山人ノ詩嚼ニ供スルニ足ラズ」というように、「口腹家」の詩腸を鼓吹するようなものでなければ、詠うべき対象にはならないのである。

便宜上、ひとつだけ例をあげよう。寛政十年（一七九八）の秋に、三十六歳の如亭は鮭の名産地である新潟に遊んでいるが、その折に詠じた七律が本書に載せられている。「余ガ性、魚ヲ好ム」と述べるほど魚好きだった如亭は、よほど当地が気に入ったものか、「跋結（サケ）ハ越後ノ新潟ニ出ヅル者、最モ佳ナリ。新潟ハ一馬頭ノ地、亦タ繁華ト称ス。余ガ詩ニ言ヘルコト有リ」と前置きして、次のように謳いあげている。

八千八水　新潟ニ帰シ
七十二橋　六街ヲ成ス
海口　波平ラカニシテ　湊舶ヲ容レ
路頭　沙軟ラカニシテ　游鞋ヲ受ク
花顔柳態　人ヲシテ艶ナラシメ

火膾霜螯　酒懐ヲ著ク
道フコト莫レ　三年　一笑ニ留ルト
此ノ間　何ンゾ恨マン　骨　長シヘニ埋ムルヲ〔3〕

新潟は寛永から承応にかけて港湾が整備され、諸国の船がこの港に湊集するようになってから、にわかに発展しだした。その開港の当初から多くの遊女が集まるようになり、越後の国随一の繁盛を極めて、文人墨客の来遊する者、ここの遊廓に足を踏みいれぬ者はなかったという。もちろん、如亭も新潟滞留中、折花攀柳の雅客であったことは間違いない。また、新潟の三面川は古来、鮭の名川として名高いが、おそらく如亭の賞味したのも、この川から取れたものだったろう。

それはそうと、この詩の出来栄えはどうだろう。私は漢詩の門外漢ではあるが、派手な詠み口といい、浮き立つようなリズムといい、まず上乗の出来栄えと言ってもいいのではないか。特にはじめの聯などは、数字の使い方に工夫が凝らされていて、水と橋の都・新潟の街衢のありさまが目に浮かぶようだし、また、おしまいの聯は、「老饕」と称して口腹のよろこびを謳った、大通・蘇東坡の次の句を思わせる。

「日々ニ荔支ヲ啖フコト、三百顆。妨ゲズ、長シヘニ嶺南ノ人作ルコトヲ」（「食荔支」）

しかし何もまして、この「新潟」の詩に謳われているのは、海彼のエピキュリアン蘇東坡に、おさおさ引けをとらぬ快楽主義なのである。「花顔柳態（＝色）」と「火膾霜螯（＝食）」とに引かされて、当地に骨を埋めてもよいと、この漂泊の詩人は言ってのける。こういうところに、「色食、性ト成ル」（『柏山人碑』後述）と評された如亭の面目が躍如とし

ていよう。

ところで、この「新潟」の段を読むと、後年、『江戸繁盛記』によって一時に文名を馳せた、寺門静軒の『新潟繁盛記』（安政六年刊）が思い起こされるが、富士川英郎氏も『鴟鴞庵閑話』の中で指摘しているように、『詩本草』には、「それぞれの土地の繁盛記といった趣き」があることは確かである。

話はいささか飛躍するが、ここに本書の新しい紀行文としての面目があるように思う。

その理由の第一に、今日ではもはや珍しくもないが、各地の繁盛のありさまと食味の品評とをあわせ述べた書は、当時としては斬新でユニークであったということ。本書は「食味を主題とした一種の旅日記」（『鴟鴞庵閑話』）ともいうべきものであるが、そういった類の著作は従来なかったのではないか。私は寡聞にして知らない。

それから第二に、日本の紀行文学の主流と目される芭蕉の遍歴のように、「前途三千里のおもい胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ」といった態の、旅に対する一種ひたぶるな感情が希薄であるということ。もちろん如亭として、いつもノンシャランを決めこんで、旅に旅を重ねていたわけではない。むしろ生来の浪費癖のため、必ずしもゆとりのある遊歴ではなかったようだし、その詩の多くは旅愁の色を濃くにじませている。しかし、それは詩の題材として格好であるからで、それはそれとして、この放浪詩人は結構、旅そのものを楽しんでいたのである。

例えば、信濃の上田には実弟立人の住まいがあったが、文化十年（一八一三）の冬、そこに長逗留した折の話が本書に出てくる。もちろん気のおけぬ実の弟のもとに寄寓したせいもあろうが、このときは「酒茶詩画、月ヲ累ネテ、楽シミ言フベカラズ」だったという。おまけに、日々の食膳にのぼった数々の珍しい禽獣類の肉が、食道楽の詩人の舌をよ

ろこばせた。別れにのぞんで如亭は、「人生一世、誰カ客ニ非ザラン。雞猪ニ偶著スレバ便チ故郷」(4)という絶句を作って弟に贈ったのち、「筆ヲ擲チ、大笑シテ」また遊歴の旅に出ている。こういう楽天主義は、旅に絶えず詩的緊張を課した禁欲的な芭蕉の紀行には薬にしたくも見当たらない。そこへゆくと、ヘドニストの如亭は――これは『詩本草』には書かれていないことだが――旅先で、男色家の料理人に詩を贈ったり(5)、好みの妓女に詩を捧げたりもしている(6)。こういうあたりに、「所謂人生ハ行楽ノミ」(7)と人生をしゃれのめす、風流狂蕩の詩人。如亭の真骨頂があるのだ。

このように、旅にある種の悦楽を見いだすことは、交通が困難であった時代にはとうてい考えられないことである。近世以前の紀行を読むと、紀貫之の『土佐日記』にしろ、阿仏尼の『十六夜日記』にしろ、道に難渋していることばかりが目について、現代の読者には、ある種のうっとうしさを感じさせるばかりで、旅の面白さなどは一向に伝わってこない。ことほどさように、近世以前の旅行は難儀きわまりないものだったということだろう。

ところが、江戸時代も半ばを過ぎると、未曽有の太平の世を迎えて、前時代よりも飛躍的に街道の往来が安全になったこと、また宿場の設備が整ってきたこと、などによって、しだいに旅行という行動文化が起こってくるようになる。とりわけ田沼時代の享楽的風潮がレジャー・ブームをもたらし、物見遊山といった比較的気楽な旅が一般に普及する。太平の閑暇をもてあましていた人びとは、貴となく賤となく、行楽にエネルギーのはけ口を求めるようになったのである。

試みに、『詩本草』の中から遊山の例をあげれば、本書の冒頭に、文化五年（一八〇八）の夏、富士山登頂を試みて遭難した如亭が、命からがら帰還するという話が出てくる。山中の石室に閉じこめられた如亭は、三昼夜、白粥だけをすすって飢えをしのいだというが、それ以来、白粥は見ただけでも吐き気がする、という諧謔を弄している。さらに面白

いことに、この話は江戸の漢詩壇にゴシップとして伝わり、菊地五山などは如亭の遭難をからかう絶句三首を作って、当時の詩壇時評ともいうべき『五山堂詩話』に発表している(8)。ともあれ、如亭の登山はさんざんな結果に終わったけれども、思うにこれは、「富士講」の富士登山といったような、当時の享楽的行動文化の盛行とは無縁ではないだろう。

こうした物見遊山の旅行の流行と前後して、儒者、国学者、本草家、医者、詩人、歌人、俳諧師、書家、画家、篆刻家らが、地方を遊歴することが一般化し、これらの知識人の手になる旅行案内記、紀行文、名所図絵といった類の刊行物が世に迎えられ、氾濫するようになる。これらの刊行物の際だった特徴は、ひと口にいえば、読者を旅へいざなうといった点にある。十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』や安藤広重の浮世絵「東海道五十三次」などの出版が圧倒的な好評を博したのは、その著しい成功の例だろう。このような新しい紀行のありかたは、当然、日本の紀行文学に質的な転換をもたらさずにはおかなかった。人びとはもう、『更級日記』や『おくのほそ道』などのような、伝統的な紀行文学の様式にはとらわれず、旅行を楽しみつつ、旅先で見聞した風物がいかに珍しいかということに力をいれて、紀行を書くようになる。その極端な例が、江戸後期の画人・司馬江漢の『江漢西遊日記』だろう。これは悠々閑々といおうか、アッケラカンといおうか、ともかく実にノンシャランな旅日記なのである。そこにはもう、西行、芭蕉の旅などのように、求道的な要素は微塵もない。

もちろん、どんな著述であれ、それが書かれた時代を表現しないということはない。この『詩本草』にも、おびただしい人びとを諸国漫遊に駆り立てた江戸時代のエネルギーの反映を認めることが出来るのである。要するに本書は、闊達な江戸人の手になる、一種の食味紀行と言ってもいいのだが、いや、ひと口にそう言ってしまうまえに、いましばらく如亭の人となりに目を転じてみよう。

三　一落魄ノ羈人

柏木如亭、名は昶、字は永日、通称は門作。宝暦三年（一七六三）、幕府の小普請方の大工棟梁の息子として、江戸の神田に生まれた。生粋の江戸っ子である。市河寛斎門下の高足で、詩書画三絶を善くした。

終生の友人・葛西因是の『柏山人碑』(9)によれば、「山人ノ家、世々木匠ヲ以テ俸米ヲ征夷府ニ受ク。又、役ニ任ゼラレル毎ニ直ヲ受ケ、余贏有リ。自ラ衣食乏シカラザルニ、山人、棄テテ事トセズ」というから、家は幕府の世禄を食んで裕福であったようだが、若い頃から家産を事とせず、寛斎の主宰する江湖詩社に拠って詩作に耽溺、たちまち頭角をあらわして、師の寛斎に「江湖詩社ノ翹楚」(10)と称揚されるまでに至った。

ところが、寛政六年（一七九四）、三十二歳の如亭は、処女詩集『木工集』上木後、「風流ハ到底、官事ニ有ズ」(11)と家業の大工棟梁職を辞職、弊履のごとく十人扶持の世禄を投げうってしまう。別の詩では家業に対する自己の不適格を嘆いてはいるものの、結局のところ、「詩魔ノ素志ヲ妨グルヲ奈トモスル無シ」(12)の挙げ句のことであったろう。「興感ヲ風月ニ寄スル所ノ者ハ独リ詩ノミ」（『木工集』高岡秀成序）と揚言してはばからない、この詩人においては、現実生活と文学との比重とが、すでに転倒していた。

この後、如亭は江戸を食いつめて、長い遊歴の旅にのぼる。その足跡は、「山人、四方ニ客游ス。其ノ跡ハ多ク信濃越後ニ在リ、或イハ伊勢遠江ニ在リ、又、平安備中間ニ在リ。其レ北ニ在ルヤ、忽チ又、南ニ在リ、又、西ニ在リ。」（『柏山人碑』）という風に、雲煙のごとく変化して留まるところを知らない。それはある意味で、如亭の遊民としての生活圏

の広さを物語っているが、しかし、こうした流浪のはて、文政二年（一八一九）、貧窮のうちに京都で客死したのである。友人の頼山陽が『如亭山人遺稿』の序[13]の中で、「嗚呼、山人ヲシテ少シク節ヲ祈リ、行ヒヲ飾ラシメバ、即チ軟輿ニ安座シ、美シキ衣食、好キ妻妾、其ノ嗜好スル所、致スベカラザル無カランヤ。何ンゾ必ズシモ霜雪ニ蹩孽シテ字ヲ売リテ活ヲ為シ、客土ニ窮死スルニ至ランヤ」と嘆いた所以である。同じく潤筆料稼ぎのため、しばしば地方を遊歴しなければならなかった山陽にとって、この友人の悲惨な末路は他人事ではなかったらしい。如亭の没後の天保二年（一八三一）に、山陽は遊歴中の梁川星巌に宛てて、「老兄も若キトモ不レ可レ言、今の内に身世之計御定ナケレバ、成二二如亭一ト存候憂也」（『頼山陽書翰集』）という手紙を書き送っている。この星巌こそ、最晩年の如亭が遺稿の開版を託した友であり、また境遇も似通った無位無官の放浪詩人であった。山陽はそういう星巌の行く末を案じて、如亭の二の舞になるぞと、わざわざ手紙で忠告しているのである。おそらく真情から出たものであろう。

しかし、山陽はさらにつづけて、こうも言う。「然リト雖モ、是レ其ノ山人タル所以ナリ。夫ノ河翁諸人、皆、上游ニ拠リ、王侯ト交通シテ声華意気、一時ヲ傾クルニ足ル。而シテ山人ハ、一落魄ノ羈人ヲ以テ、之ト名ヲ斉シクス。以テ其ノ才気ヲ見ルベシ」と。如亭は江湖詩社の四才子と称されながら、ともに詩名を競った社友の、大窪詩仏や菊地五山などが、江戸の詩壇の中心となって勢力を張り、権門富家に出入りして暮しぶりも華やかであったのに対して、文字どおり流離のうちに生涯を閉じた。しかし、この放浪落魄は、如亭が生活を捨てて芸術を択った結果にほかならない。これこそ如亭を如亭たらしめる所以である。山陽はそういう不羈の友人を評して、「一落魄ノ羈人」だという。世にはまた、こういう知己の言もあるものなのだ。

四　放蕩と禁欲

文化八年（一八一一）に、備後から京都に出てきた山陽は、上京匆々、江戸の市河米庵宛の書簡（『頼山陽書翰集』）の中で、都の水になじめない自分の孤独を打ち明けている。「肴を食はず、水ばかり自慢する」京都にきたが、当地の儒者は「城府を構えて、高くとまっている」ので、「虫にさわる」というのである。どういう誼みで知り合ったのか判然としないが、たまたま在京中の如亭が、そんな屈託を抱えた山陽に対して、「ヒトリッコに遊べ」と教えたという。この手紙についてみると、二人の交遊が開けたのは、この頃のことではなかったかと推測される。

当時、山陽は三十二歳、管茶山の塾から出奔してきたばかりで、京都の詩壇に名を得ようと満々たる野心を抱いていた。ところが、圭角の取れない山陽は、学界のボス的存在の村瀬栲亭と衝突して、京儒達の総スカンを喰らっていた。狷介ゆえの孤独であったが、これにはさしもの山陽も弱ったらしい。時に如亭は四十九歳、京都を根拠地にして、相変わらず西へ東へと異境をさまよっていた。

そんな不遇の二人がふとしたことから出会い、年上の如亭が年下の山陽に、如上のような忠告をしたわけだが、「ヒトリッコに遊べ」というところが、いかにも如亭らしいきっぱりとした口吻である。それは「疎爽俊抜ノ気有リ」（『如亭遺稿』山陽序）と評された江戸っ子の涼しいきっぷを思わせる。この歯切れのいい言葉は、学界のつきあいから閉め出されて、意気消沈していた山陽を力づけたに違いない。このとき以来、山陽の如亭に対する友情は終生かわらず、如亭の没後、『遺稿』の序を撰して、その不羈の才を惜しんだことは、すでに見たとおりである。

ともに遊蕩児の評判をとった二人だが、どこか垢ぬけないところのある田舎者の山陽は、この颯爽たる都会的な詩人をどう見ていたか。『遺稿』の山陽序は、その風骨をこう伝えている。

「山人、官ヲ棄テテ髪ヲ剃リ、隻影千里、雲水僧ノ如シ。而モ服ハ必ズ時様ニシテ、風流自ラ喜ブコト游冶少年ノ如シ。喜ンデ座ヲ罵リ時新ヲ食ラヒ、銭ヲ論ゼズ。侠客ノ如シ」

如亭は一所不住の雲水に身をやつしながら、食通をもって任じ、烟花風月の遊びに耽り、衣服はいつも最新流行のものを身につけていた。こうしたダンディーなプレイ・ボーイぶりは、知人達の間では語り草だったらしく、いくつかの逸話の中に跡をとどめている。例えば、若い頃から相爾汝する仲だった因是も、こう述べている。

「山野ノ人、文墨ヲ尚ザレドモ、山人、強イテ吟詠書画ヲ沽リ、唯ダ価ノ高カラザルヲ恐ル。得ル所ノ潤筆ハ尽ク之ヲ揮ヒ、狭斜ニ噉啖ス。魚肉ハ大塊ヲ嚼ラフニ非ザレバ飽カズ。風月ノ遊ビハ老テモ少壮ニ減ゼズ。衣服ハ斬新ニシテ、務メテ時世ヲ逐ヒ、酒ヲ嗜マズト雖モ、好ンデ嫖客ト歌唱混坐シ、時ニ戯劇打諢ノ語ヲ作ス。蓋シ色食ハ性ト成リ、天心爛熟、人モ亦、此ヲ以テ山人ヲ疵スル無シ」（『柏山人碑』）

これは老いてもなお衰えぬ如亭のデカダンとダンディーぶりを伝えたものだが、それは若い頃から一貫して変わらず、同じく因是は『如亭山人藁初集』（文化七年刊）の序においても、「少シテ生産ヲ事セズ、情ヲ烟花風月ニ放ニシテ、跡ヲ游侠俳優ニ混ズ。（中略）履行多クハ縄墨ニ中ラズ」と記したうえで、「浮浪少年ノ態、竟ニ磨滅セズ」という辞を呈している。この言葉を額面どおりに受け取れば、如亭は終生、游蕩児として鳴らしたのである。

こういうところから、如亭は「江南第一風流才子」と自称した明の唐寅に擬せられたりもする。が、「劇場博士」[14]といわれ、田舎芝居の役者までつとめたことのある如亭は、むしろ清の李笠翁を気取っていたのではあるまいか。如亭の

笠翁に対する傾倒は、『詩本草』に『間情偶記』の「飲饌部」からの引用があることにもうかがえるし、それに、浦上春琴の服部竹塢宛の書簡[15]によれば、如亭の死後、身辺に残された遺愛の書が『笠翁一家言』だったということにもうかがえる。才気縦横のあまり、とかく放埒になりがちだった如亭の生活ぶりは、才情艶逸といわれた笠翁のそれを思わせるのである。

しかし、そういう風流放誕な生活態度に反し、詩作態度は一転して厳格を極めた。「詩人得意ノ場」[16]と詠った詩作の場にひとたび入れば、「几研整斎、性、短視ニシテ、詩ヲ録スルニ必ズ細楷ヲ用ヒ、勤敕書生ノ如シ」（『遺稿』山陽序）という、およそ「游冶少年」の評判とは掛け離れた生まじめぶりなのである。この詩作の営みにおける、「游冶少年（＝放蕩）」から「勤敕書生（＝禁欲）」への極端な変わり身は、如亭という奇矯な詩人を考えるとき、けして看過することはできない。

「永日ハ人ト為リ懶堕ニシテ、性、煩事ニ堪ヘズ。唯ダ能ク詩ニ耽ル。其ノ苦吟ニ当ッテハ、搆思スルコト百練千鍛、一字モ苟モセズ」

これは二十代の詩作活動の結実である『木工集』の、高岡秀成の序文だが、こと詩作に関するかぎり、如亭は若い頃から、専門家意識が異常なまでに強く、常に詩句に彫心鏤骨の彫琢を凝らした。また、自分の詩集を編む際にも、収録詩を厳選しぬき、自らよしとしないものは、潔く捨てて顧みることはなかった。

「集ハ旧ト三百余首。其ノ前作ノ未ダ変調ニ及バザル者ハ悉ク刪去シテ、纔カニ五十一首ヲ存ス。蓋シ其ノ意ハ精ニ在リテ多キニ在ラザルナリ」（『木工集』序）

こういう選詩の厳格さは、詩友の因是をして、「余曰ク、甚シキ矣、山人ノ愛ヲ割クコトヤ。既ニ愛ヲ妻子ニ割キ、又、

愛ヲ頭髪ニ割ク。今又、兼ネテ其ノ詩ヲ割クニ至ル」（『初集』序）と言わしめるほどだった。それゆえ如亭の詩といえば、多作を誇る傾きのあった当時の詩人の集にくらべると、寡作ながら、すこぶる佳什清唱に富んでいるのである。

そう、詩が如亭のすべてだった、と言っていい。

「永日自ラ云フ。我ニ他技無シ。興感ヲ風月ニ寄スル所ノ者ハ独リ詩ノミ。苦吟シテ日ヲ累ネルモ、未ダ嘗テ労ト為サズト」（『木工集』序）

ここに描かれているのは、ひたすら表現に傾斜してゆく、いわゆる「詩囚」の姿である。詩の本質は表現以外のなにものでもない。とすれば、苦吟嘔心もいとうところではない。「一世ノ詩窮」[17]というほど、詩に淫した如亭の身内には、みずからの詩にたびたび繰り返されるように、のっぴきならぬ「詩魔」が巣喰っていたのであろう。この「詩魔」こそ、ひいては人生から逸脱させ、放浪に駆り立てた元凶ではなかったか。

ときに『詩本草』の中でも、如亭は潔癖な詩人の顔をのぞかせている。例えば、「夫レ詩ヲ作リテ支離病ヲ免レザレバ、日ニ数百首ヲ累ヌト雖モ、終身、詩人ト称セラルルコトヲ得ズ」と断じたり、また例えば、「詩人胸間ノ俗習ノ気ヲ降スノ良剤ナリ」として、『芥子園画伝』中の去俗論にも似た自説を主張したりする。この口腹の快楽を説く書においてさえ、作者は真箇の詩人たろうとすることを忘れないのである。

思えば、この禁欲的な「詩囚」に許された快楽のひとつが、美食だったのかもしれない。美食はこの世で、まず人を失望させることのない、間違いのない快楽なのである。

五　田舎わたらい

万巻の書を読み千里の道をゆく。これは中国の先達はいうに及ばず、我が国の江戸期の文人たちの目指したところでもある。とりわけ文人画の芸術にとっては、いわゆる山水の訣であった。済勝具という言葉がある。景勝の地を踏み渡る健脚を指していう。山水の美をわが胸に貯えるには、何よりもまず、この済勝の具をもって山紫水明の地を踏破しなければならない。したがって、旅はとりもなおさず、文人画家たちの美的生活上の実践であった。

『傍訳標註芥子園画伝』の如亭の序にいう。「吾ガ性、山水ヲ愛ス。又、山水ヲ画クコトヲ愛ス」と。放浪の詩人にして画家でもあった如亭は、生涯、煙霞の痼疾に取りつかれ、吟杖を引きながら、てくてくと千山万水を跋渉した。それは詩嚢を肥やし画嚢を満たしたことであろう。如亭もまた、天地山川の間に遨遊する文人の一人であったと、まあ、買かぶっておいてもよい。

ところで、すでに寛文の頃から、たとえば隠元などのように、詩文ばかりでなく、琴棋書画の四芸をよくする僧侶が来朝し、海彼の高踏脱俗的な文人趣味が我が国にも広まっていた。が、いかんせん、彼我の文人の社会的経済的な相違により、それはある意味で、和様化せざるを得なかった。特に我が国の文人の経済的基盤は脆弱で、君侯貴紳をパトロンに戴いた少数の例外を除けば、当時の文人、儒者の大半は生活難に苦しめられ、地方の権門富家の庇護にすがって、詩文や書画をひさぐ出稼ぎをしなければならなかったのである。江戸も半ばを過ぎると、その手の文人が数えきれないほど出現し、本来、文人の余技であったはずの詩書画は換金的な価値を生ずるようになり、なかには専ら糊口のため、詩家、書家、画家をもって門戸をはる文人墨客も出てくるようになった。つまり文人の専門家である。

例えば、京都の大儒・村瀬栲亭門下の逸材と謳われた中島棕隠でさえ、潤筆稼ぎのため、ときどき地方を渡り歩かね

ばならなかった。そういう旂歴売文の渡世を、棕隠は「田舎わたらい」とよんで、自嘲しているくらいである[18]。また、猪飼敬所などは、三都の文人、儒者達が口のために駆られて東奔西走している有様を見て、落ち着いて書を読む暇もないほどだと断じてさえいる[19]。

まして、「官匠」の地位を棒に振った如亭の場合、なおさら「田舎わたらい」にいそしんで、生計をはからねばならなかった。地方の文雅愛好家の庇護を頼って、「生ヲ謀ッテ、南北、疲ルルコトヲ知ラズ。行李蕭然トシテ、到ル処ニ随フ。自ラ笑フ、身ハ筝上ノ鴈ノ如シ。往来、但ダ是レ人ノ移スニ信ス」[20]という転々流寓の生活を送らざるを得なかったのである。

そんな流亡の身の窮状を、晩年の友人・山陽は、ひどく小説的な筆を弄してこう描いている。

> 已ニシテ山人、江戸ニ入リシモ、復タ居ルコトヲ楽シマズ。越信ヲ歴テ、再ビ平安ニ来タリテ、担ヲ東郊ノ一廃寺ニ卸ス。余、報ヲ得タリ。時ニ大イニ雪フル。其ノ画友ノ紀伯挙（浦上春琴）ト屐ヲ蹋ンデ往訪ス。折竹、路ヲ遮リ、門ニ人跡無シ。既ニシテ相見ル。雪ヲ掬ッテ茶ヲ煮ルコト平生ノ如シ。山人、行李蕭然タリ。曰ク、吾、越ヲ出デシトキ、獲ル所ノ潤筆ヲ積ンデ、嚢橐頗ル満チタリ。而レドモ窮冬ヲ以テ千里ヲ行クニ、馬輿飲食、自ラ慳ムヲ得ズ。是ヲ以テ手ニ随テ尽キ、一寒此ノ如シ。将ニ更ニ備中ニ適キテ、知ル所ニ就カントス。乃チ君輩トトモニ花ヲ観ルヲ謀ルベキノミト。（『遺稿』山陽序）

文化十一年（一八一四）の暮、如亭は一旦江戸に帰り、詩友の大窪詩仏の詩聖堂に奇寓した。が、ひさびさの帰郷な

のに、半年ほどしか滞在せず、その後数年、また信越の間をさまよい、文化十五年（一八一八）の正月、稼いだ潤筆をすっかり使い果たして、再び京都にもどってくる。山陽は早速、京都東郊の廃寺に寓する如亭を訪ねて旧交を温めた。しかし惜しむべし、この一刻が永の別れとなる。この後間もなく、如亭は帰らぬ人となってしまうのである。またちょいとひと稼ぎしてくるから、それから花でも見ようという、いかにも洒脱な、如亭らしい約束もあだになった。行年五十七歳。「得ル所ノ潤筆ハ尽ク之ヲ揮ッテ狭斜ニ噉啖ス」といわれるほどの浪費家であったが、如亭は金を浪費した以上に、己を浪費したと言えようか。折しも、山陽は西遊中で、友の死を見取ることができなかった。西遊は同じく、「田舎わたらい」であった。

「人ニ逢ヒテ、只ダ説ク、帰意無シト」(21)という、負けぬ気性の如亭ではあったが、老いとともに、旅愁に倦み疲れていったようだ。「水ニ臨ンデ郷念ヲ増ス」(22)と帰心をつのらせながらも、しかし、脚はついに再び江戸の地を踏むことはなかった。この漂泊する詩魂を、晩年の如亭は、清新な叙情詩に昇華させる。その絶唱の一つ、「遠行」（『遺稿』所収）という次の七絶は、寒酸孤独の生涯を、わずか二十八字のうちに詠いこめている。

東生西活　何レノ日ニカ休セン
復タ天涯ニ向ッテ影ト双ブ
笑フニ堪ヘタリ　飯蘿我ヲ駆リテ出シ
少時モ許サズ　幽窓ニ臥スヲ

わざわざ芭蕉などの例を持ち出すまでもなく、我が国の叙情詩は漂泊する魂と無縁ではない。そうした意味では、如亭もこの系譜につながる詩人と言っていいかもしれない。しかし、俳諧の宗匠として大きな勢力を振るった芭蕉には、杉風という有力なパトロンがついていたし、また臨終の際も、多くの弟子に見取られて往生を遂げた。それに比べて、如亭は晩年に及んでも、絶えず貧乏に追われ、潤筆料稼ぎのため、西へ東へと浪々の日々を送らざるを得なかった。その挙げ句、尾羽打ち枯らして、ひっそりとこの世を去ったのである。臨終の際の困窮ははなはだしく、ために友人の浦上春琴、小石元瑞らが、遺愛の筆研書帙を売って、辛うじて野辺の送りを済ましたという（『遺稿』山陽序）。

最晩年の如亭は、宿痾の水腫に苦しめられながら、遺稿として『詩本草』を書き上げていた。本書はある意味で、詩と旅と美食のうちに過ぎた、自分の放浪生活の仕切りと考えていいかもしれない。

「余、少時、酒海肴山ニ北里ノ中ニ堕在ス」

これは若き日の遊蕩体験の回想である。『詩本草』のおしまいのほうに、いきなりこんな追憶が語られるのは、紅燈緑酒に沈湎した、華やかな青春を忘れかねたためだろうか。二十代の如亭は、十八大通の一人として名高い文魚と交じわりを結び[23]、盛んに吉原に出入りして、江戸の一番いいところを堪能していた。この遊蕩体験を、師の寛斎の『北里歌』にならって、『吉原詞』三十首に結実させるのだが、その竹枝風の艶詩は、詩友たちの間でもてはやされた。如亭得意の作といえよう。ただし、これはついに刊行を見ず、そのためか、三十首のうち二十首を『詩本草』の巻末に収録して、艶麗繊細な詩才をほしいままにした青春の記念としたのであろう。だが、派手やかな往時を追憶すれば、「亦夕遊仙枕上ノ一夢カナ」と、つい溜め息がもれるのも道理だろう。如亭はすでに迫りくる命数を暁っていた。

この「遊仙枕上ノ一夢」は、死の直前までとぎれなかったようである。巻菱湖の書簡によると[24]、「たわけの開山長徳

寺如亭和尚」は、いまわの際に、「新潟の寺町へ」と呟いたいう。寺町とは新潟の遊廓である。新潟はすでに述べたように、ここに骨を埋めてもよいとまで言った、曾遊の地である。ふと見た垂死の夢にも、取り返せない青春の愛惜がもだえていたのだろうか。それにしても、この夢がなぜ江戸の吉原へ向かわなかったか、謎といえば謎である。

『詩本草』の最終段は、命、旦夕に迫った、文政二年（一八一九）の秋に書かれたと覚しい。その絶筆ともいうべき最終段において、この不遇の詩人はこう述懐している。

昔人云ハク、古ヘノ山人ハ山中ノ野人、今ノ山人ハ山外ノ遊人ナリト。余、到ル処、幸ヒニシテ舘ヲ掃ヒ餐ヲ授クル人有リ。未ダ嘗テ凄風苦雨十分ノ艱ニ逢ハズト雖モ、畢竟、山外ノ遊人ナリ。知ラズ、幾時カ衣食略々足ルコトヲ得テ、長ク山中ノ野人ト為ラン。噫。

如亭はときに風流、ときに放逸、ときに奇行、ときに放浪と、絶えず俗世間の外を歩みつづけてきた。「畢竟、山外ノ遊人ナリ」という晩年の感懐は、みずから無用者の遊民であることを意識していたということに他ならないだろう。そして長年の「田舎わたらい」に疲れた老衰の身には、「山中ノ野人」という閑居幽棲が慕わしい。しかし、貧窮とは呵責ないものである。いつになったら衣食こと足りて、この穏やかな出世間的境遇に入ることができるのだろうか。貧寒とした廃寺の一室で死期をさとりつつ、「ああ」と、ひとり洩らした嘆息は、おそらくゾッとするほど深かったはずである。

巻菱湖が「たわけ」と呼んだ如亭を、「風狂の詩人」というだけなら、つい一言でいえる。だが、一生を賭けて逸脱しつづけた風狂の精神とは、そも、いかなるものか。残念ながら、今の私には答えの持ち合わせがない。かわりにという

訳でもないが、パスカルの次の言葉を引いて、この稿を終えたいと思う。

「ひとのあらゆる不幸は、ひとが部屋の中にじっとしていられないというところから生じる」（『パンセ』）

このパスカルの言葉と、如亭の「少時モ許サズ、幽窓ニ臥スヲ」という詩句を思いあわせたとき、なぜだか、ふっと目頭が熱くなるのである。

注

（1）テキストは揖斐高氏編『柏木如亭集』（三樹書房）の覆製本によった。また、以下しばしば引用する『木工集』、『如亭山人藁初集』（以下『初集』と略称）、『如亭山人遺稿集』（以下『遺稿』と略称）」などの詩集も、すべて右のテキストによった。なお、同氏編『柏木如亭年譜』（『柏木如亭集』所収）も、大いに参照させていただいた。

（2）「買菊」『遺稿』所収。

（3）この詩は『詩本草』のほかに、「新潟」と題して『初集』にも収められている。

（4）この詩は『詩本草』のほかに、「示立人弟」と題して『遺稿』にも収められている。

（5）「贈庖人木星」『遺稿』所収。

（6）「寄知理校書」「贈妓」ともに『遺稿』所収。

（7）この詩は『詩本草』のほかに、「醉後作画贈服文稼」と題して『遺稿』にも収められている。

（8）『五山堂詩話』（日本詩話叢書所収）巻三参照。

（9）『事実文編』（国書刊行会）五十五参照。なお、この碑は日暮里の養福寺に現存するという。

（10）『訳註聯珠詩格』寛斎序。テキストは（1）の覆製本によった。

（11）「莫笑」『木工集』

（12）「奉呈北山先生」『木工集』

（13）『遺稿』山陽序は、初稿と定稿では若干の異同がある。ここでは（1）のテキストによった。

(14) (1) の『柏木如亭年譜』参照。
(15) 同右。
(16) 「寄題管伯美所居」『木工集』
(17) 「書懐」『初集』所収。
(18) 『中村幸彦著作集』(中央公論社) 第三巻「作家環境」参照。
(19) 松下忠氏著『江戸時代の詩風詩論』(明治書院)「第三期詩壇の趨勢」参照。
(20) 「旅寓」『遺稿』所収。
(21) 「吉備雑題」同右。
(22) 「夏日幽居」同右。
(23) 『木工集』には「訪文魚」という詩が収められている。
(24) (1) の『柏木如亭年譜』参照。